

津田昇平教話 第三十三話

令和三年二月二日 朝の教話

百人百色に説く

おはようございます。令和三年二月二日をお迎えいたしました。

今日は二月二日ということで、節分になりますね。朝起きて着物に着替えておりましたら、三男が起きてきまして、「お父さん、今日は『鬼は外、福は内』なんやで。幼稚園で鬼が来る」って、こう言いましてね。おお、と思って。それを言われて、「ああそうか。今日は節分か」と思いましてね。

昔から、「鬼は外、福は内」って、まあ言いますもんね。あんまりちっちゃい時は何も考えずに、言う機会があれば言うぐらいなものでしたけれど、ま、でも、そうやって鬼は外に行ってもらって、福は内に来てもらってということなんかは、そりゃあ文字通りそうなんですけど。

まあこう、事柄ことがらですよね。鬼というのは、何の象徴なんやろかと思いがら、ちよっと着替えながら、考えたり、思ったり、思いを馳はせたりしておりました。ま、詳しく調べたら、色々出て来るんやろうとは思うんですよね。由来とかも。

まあこう、難儀なんぎっちゃあ、難儀なんぎかもしれませんねえ。難儀がやって来ないように、人間にとつての難なんが一つの鬼やと思つたら、難は外に行つてもらつて、自分であつたり、家の中を守つて頂いたりということであり、また福というのは、神様のおかげであり、神様の幸さいでありね。そういったものが、どうぞわが身やわが一家の方に頂けるようにということを書いておられるのかなあ。

と同時に、そういうおかげをいただくと思ったら、どうしたらええんやろうかと思ったら、やっぱり信心の目で考えたら、誰だって皆ね、世の中の人、教祖様の時代でも皆、福は内に来てもらいたいし、鬼は外に行ってもらいたいしって、みんな思ってたはすなんですよね。それでいてまた、それを願って、いわば難儀も来ないように、おかげは来るようにと思って、それぞれ各地で土着じちやくの信仰を大切にしながら、過ごしておられたんだろうと思うんです。でもやっぱりなかなか難儀になっちゃいますよね。

で、教祖様のところに御縁頂かれる方は頂いて、お話を聞かしてもらきねんきとうう。祈念祈祷で助かる道ではないと。話を聞いて助かる、そういう神様で

あるってことをね、仰って。

つまり、「おかげは和賀心わがこころにあり」って仰いますから、自分の心一つでやっぱりおかげが生まれて来るし、教えの中には、「わが心の鬼がわが身を責めるぞ」という教えもありますね。

そう考えると、鬼は自分の中にあると。わが心の神によってまた救い助けて頂くという面もあると思いますし、そういうと、「鬼は外」の「外」っていうのは、ある意味、自分の中のめぐりであったり、我情がじようがよく我欲であったり、つまり神様のおかげ、福を阻さまたんでいる要因のようなものを、自身の中から、あるいは自分の一家の中から取り払って頂くこと、出て行ってもらうこと。

そうすると、自おのずからなんでしょうね。神様のおかげ、福もまた自ずから入ってくるということなのかなあと思いながら、何となくそんなことを考えて、何となく辻褄つじつまが合うもんですから、納得して下に降りてきましたけど。

と、思いながら、よく二月二日って言うたら節分。節分言ったら、恵方巻えほうまきもよう言うなあとかね。恵方巻かあ、日柄方角ひがらほうかくやなあ。これどないしようかなと思ってね（笑）

日柄方角って、別にあっちが悪いこっちがええという風な考え方というよりも、御道おみちでは、結局どの方向でも神様のお体で、どこに行ってもね、北だろうが南だろうが、東だろうが西だろうが、もうどこもみな、神

様のお恵み、天地のお働きを頂いてのことですから、あっちが良くてこっちが悪いということはなくて、まあ目に見える方角を問題にするよりは、自分自身の心の内をよく点検しようというところでね、教祖様はお話を下さっておりますから。まずは私たちの心一つ、今日一日神様のおかげを頂けるような心で過ごさしてもらいたいなと思います。

一昨日まで金光大神様ごんこうだいじんのご存在おんこじについてお話をし、昨日は大西秀さんおおくしゅうさんの、どんなことでも金光大神様のお結界けっかいへお届けですね。お取次とりつぎでありのまんまのお話をしたらいいし、まずは、何かあれば、さておいてでもお参りをさしてもらおう。金光大神様の、神様のお広前ひろまへにお参りして、馳は

せ参^{さん}じて、何でもお届けをして、そして、お取次^{とりつぎ}頂いたことを心にかけてながらお願いしていく。参拜^{さんぱい}、御祈念^{ごきねん}、御取次^{おんとりつぎ}というものが大事であるということと一緒に見さしてもらいました。

今日はその金光大神様のお取次^{とりつぎ}なんですけれども、そのお取次^{とりつぎ}というのも、十人十色^{じゅうにんじゅうしき}でしてね。十人十色やし、教えの中には、百人百色^{ひゃくにんひゃくしき}って言いますかねえ。百色^{ひゃくしき}ではないと思うんですよね。百色^{ひゃくしき}という単語はあると思いますけど。

十人十色、まあ十人いたら十の色がある。もうめいめい、それぞれということなんだろうと思うんですよね。百人百様^{ひゃくにんひゃくよう}はよう聞きますよね。三者三様^{さんしやさんよう}とか、それはまあ言いますし、十人十色^{じゅうにんじゅうしき}も言います。

ひゃくじふひゃくじふ

百人百様も言いますけれど、でもまああの、教典に載^のってるところで

ひゃくじふひゃくじふ

言えば、百人百様でもなく、十人十色でもなく、百人百色という言葉で昔調べたことありますけど、そういう熟語自体はあんまりなかったんですよね。

たかはしとみえ

ろくじよういん

これはまあ高橋富枝先生、六条院教会^{ろくじよういん}っていいまして、岡山県にありましてね、教会番号一番ですからね。だから岡山県の教会番号一番ですから、たぶん全国で一番最初の教会番号やないかと思えます。で、その女性の高橋富枝先生、^{こんしやうみふじいん}「金照明神様」って言われたりしますが、その方が残しておられまして、

「御裁伝ごさいでんについては、百人百色に説く」

と仰せられた。

【理Ⅱ 高橋富枝 六】

金光様が仰ったということで。これまあ百人百色とほんとに仰ったのか、十人十色と仰ったのか、百人百様と仰るのか、その辺はちよつと定かではないです。ただまあ高橋富枝たかはしとみえ先生は、百人百色と教祖様は仰ったと記憶しているということやと思うんですけど、でも言わんとすることは分かりますわね。

御裁伝ごさいでんについては、まあ御裁伝は神様のお言葉だし、それはまあ即ちすなわ、

お取次とりつぎの中身、氏子うじこに取り次ぐ中身ですね、言葉ですね。御裁伝は神様が
こう仰おほったってなってくるし、ご理解になつてくると、必ずしも神様が
こう仰おほったという風な神様の言葉をそのまんま伝えるというのとは別に
天地てんちの道理どうりに沿したがって、これまで神様から教えて頂いた事柄じこうら、天地てんちの理ことわり、
天地の道理、神様の道、人間が神様の氏子として踏ふむべき、歩むべきそ
の道に照らして、あなたはこうだよ、こういうふうな信心していくんだ
よ、こうやって生きていくんだよ、こういう心構えでいようね、という
ことを教えて下さる。それがまあ百人いたらもう皆みな、百様ひゃくよう、百色ひゃくしき、も
うそれぞれなんだということですね。そういうことを残しておられます。
ですんで、人によっては、ある人にはこう言うし、違う人には同じよ

うな事柄でも、また違うことを仰るということはよくありますね。

私もいろんな方のお取次とりつぎをさしてもらってまして、やっぱり先の人には「右に行こうね」とっていう話をするし、似たようなお届けでも、次の人にはやっぱり「左に行こうね」とって言うし。また次の人に対しては、「動いちゃいかんよ、そこで待ったとき。座ったままでおった方がええわ」と言ったり。言うことは人によって違うんですね。

で、まあ時々ですけど、お参りしてきねんご祈念されてる中で、ある人がお届けをされてたと。別に耳をそばだてて聞こうというわけではないけれども、ふと自分の中に言葉が入ってきて、親先生が仰ってる言葉が入

ってきて、こうこうこういう風にしてご理解されていたと。でもそれはまあこう、自分自身がこう言われたことと反対だとかね、いう風なことを思っ^てて。でも、どっちなんだろうという風にしてね、「自分は右って言われたけど、あの方には左って言われたし、左の方がいいんでしょうか」とかね。何かそういう風にして言われることはありません。

でも、いやいやあなたの場合は右やし。さっきの方にとったら、やっぱり左やし。もうそれぞれ願いとすることは、結局はおんなじことをお願いしているけれども、やっぱり教える中身、伝える中身というのは、やっぱり違うんですね。

そりゃあまあこう、よく私は例えて、もう難儀なんぎになるとい^うのは、ある

意味こう道に迷っているという状態ですからね。おかげを頂く、助かる、そういう道というものがあつたら、もう目に見えない道のところがありますから、生きるというのは。

そうすると、一生懸命やけれども、これが正しいんかなあと思いつながらみんなこう歩いてるんやけれども、気が付いたら道から逸れてたりとかいうことがある。でも、右に大きく逸れてる人には「左に行き」言うし、左に大きく逸れてる人には、「右に行き」言うし。でもほんと二人とも、目指すところは、おんなじ所やったりするんですよ。助かりたい、おかげ頂きたいということ。「こういうおかげ頂きたい」でもいいんですけれど。

でも、その人が、今どっち側に寄っとるんかによって、右行った方がいいよとか、左行った方がいいよとかね。あるいは北に行った方が、南に行った方がとか、そらその人が今どこに立ってるかによって、こちらも話すことは全然違うんですよね。

「先生、岡山の金光に行って、御本部に初めてちょっとお参りさしてもらいたいんですけど、どうしたら、どう行ったらいいんですか」って言われることがあった時に、その人が尼崎に住んでらっしゃる方やったら、「金光に行ってな、金光様のお広前ひろまえに行かしてもらおう。ああ、結構なことやね。そしたらなあ、西に行ったらええよ」ってやっぱり言いますよ。

でも遠方の人が、九州の人がですよ、「先生、今度、御本部にお参りを
さして頂こうと思うんですけど、どない行ったらいいですかね」っ
て言われたら、「ああ金光ね、あなたどこに住んでんの。ああそうか、福
岡か。じゃあ東やな。東に行ったらいいよ」ってやっぱり言いますよね。

じゃあ北海道の人がいたら、北海道の人には、「ああそうか、御本部に
行きたいんやねえ、ええことやね。御本部に行くならどないしたらええ
って、そやなあ、まあ南に下って、ほんで西やな。まあ道があるんやっ
たらそうやな、南西にまっすぐ行くという手もあるけど」って言うでし
うね。沖縄の人やったらどないしますかなあ。沖縄の人が、「先生、金光
の方にちよっとお参りをさしてもらいたいんですけど」言ったら、「ああ

そうか、そしたらまあ、あれやなあ。北に行って、東に行かんといかんから、まあまあ北東かあ」とか言いながらね。

でも、人によって新幹線か、船なんか、飛行機なんかね、あるいは在来線でも行ける場合だってあるかもしれんし。でも本人たちの願いは、御本部に行って、金光様のお広前に初めてでも馳せ参じて、一度、拝まして頂きたい、おかげ頂きたいっていう願いは一緒なんですね。

でもその人が今、どこに立ってるかによって、私もやっぱり言うこと違ってきますわねえ。

東にいる人やったら、「西に行き」って言いますよ、岡山県でしたらね。でも、金光より西に住んでる人にね、私が、「西に行ったらいいよ」って

もし言うたら、そらえらいことになりまっせ。九州越えて、中国とか、その大陸の方に行っちゃいますでしょう。北海道の人にはそら「南に行つて、西に行つて」って言いますわ。まあ南西に行つたらって言うことでしょう。そやけど、ああそうですか、って北海道の人にはまあ南西に
って言つて、それをまあ、言つたら、お広前ひろまえで聞いてる人がおつて、もし
仮にね、まあそれこそ沖縄の人がそんな時ちょうどお参りして、今度御本
部にお参りしようと思うんで、って言つて、まあ私が南西って言うたも
んやから、それ聞いて、「ああそうか、南西に行ったらええんや」と思つ
て、沖縄から南西の方に行っちゃって、また反対の方向に行きますで
しょう。もっと離れてしまふんです。

つまり、何が言いたいか言いましたら、願いとするところはそれぞれ
さんじゃさんよう
まあ三者三様なんですから、でも、自分の願いが叶うための道筋と
かな
いうのは、あなたが今どこに立ってるのってことと、こちらも伝え
方も違ってくるんですよ。なんにせよ、皆立ってるとこ、ちゃうやな
いですか。もう全然ちやいますからね。

だから、今自分がどこに立たしてもろうてんのんかというものを分か
らしてもらった上で、その上で、あっちに行ったらいいよ、こっちに行
ったらいいよということを、それは言わしてもらいます。

東京の人やったら、西に行きって言う。でも、真っ直ぐ一発で行けた

らええですけど、気が付いたら、もう乗り過こして、うたた寝して行き過ぎたとかあるかもしれませんよ。これかと思ったら間違まちがって、違う方向に行ってしまったとか。それはあるかもしれません。「あ、ほんじゃあ行き過ぎたんやったら、また東に戻り」って。「え、先生、西に行け言うたやないですか」言うて。「だから私、西に来た」「いや、せやけど、あんたもう行き過ぎてもうとるやんか。じゃあ東」「えっ、東言った。先生、西言うて、次、東言うて、言いってることが真逆じゃないですか。もうわけが分かりません」って言われたら、こっちも困りますわねえ。「そやけど、今あなたが立たってる所は、『もうこの辺り』っていう神様からら覧らんなんて、この辺やでっていう所から、まあ行き過ぎてしまったんやったら、戻ら

んとしゃあないやないか」「ああそうですか、じゃあ戻りますわ」言うて、西に行こうと思ったけど、気が付いたら、まあ車で行こうとしてねえ、間違った。それこそ、車で言うたら、山陽道と思ってたら、中国自動車道やらなんか、上の方にまで行ってしまったとかなったら、どないしましようか。

ほんじゃあまあ、「先生、間違ってしまいました」って、「西と思って行ってるんですけどねえ。ああ東と思って、また戻ってるんですけど、なんかそのつもりやったんだけど、気が付いたら、なんかちよっとえらい遠い所まで来ましてね。山の方まで来まして、このまま行ってたらなんか、さんいん山陰の方まで行っちゃいそうですね」って。もう全然違うやないかと。

北に行ってもうてるやないかいと、やっぱりあります。

「じゃあ南に行こう」って。「南に行ったら御本部あるから、」

ええ、先生さつき、東に言ったやないですかと。最初は西言つて、次は東言つて、今度は南に行くんですか。いやそりゃあ、言つたとおりにはつと行きやええけれど、そうは言つても、あなただって、あつちかなあ、こちかなあ思いながら、かくしう確証あつて進んでるというよりは、さぐ探り探りでやつとるやろうから、初めての道やし、なかなかなんぎゴールにすつと行きやあええけど、それがなかなか行かんのが人間の難儀なところやし、めぐりというものやから、まあ真っ直ぐ行つてゐるつもりでも、ちよつとずつ傾かたむいてな、歩いてる先が少しずれてくるのが、まあ人間ちゆうところが

あるから、だから、今自分がずれてるんやなあと思うたら、そこをまた教えてもらうて、自分なりに何でもかんでもやろうと思うても、無理が出て来るから、やっぱり教えて頂いたことをまあ頼りにしながら、意識しながら、歩いてったらいいと。やっぱりそう言いますよね。そうしてようやく、御本部に、金光に着くことができるということがある。

でも、これは今、東におった人ですわなあ。でも、おんなじように東におった人でも、そらまた、西に行き言いましたも、そりゃあみんな西も、どの辺の西、もうだいたい西に来ました言いましたも、もうこの辺ですか言うて。でもこれ名古屋やから、もっと行かんといかんいう場合もあるかもしれんよ。西行って、もっと西行って、もっと西行ってって言うて、

今度行き過ぎて、広島まで行って、やっぱり東やわって言うかもしれない。
ん。

でもそれは、その人が今どこに立ってるんかによって、こちらがまあ伝えるべきところも違います。でも目的は、その人が神様のおかげをいただけるところまで導くことなんです。

でもそれが簡単じゃない。本人も簡単じゃないし、上手く自分が何でもかんでもコントロールできるわけでもないし、こちらもずっとついて回って教えたりするところもあるけれども、でも、本人が生きて、本人がまあ歩いて行きますからねえ。こっちがハンドル全部持ってるわけでもあらへんから、やっぱりいいよのところは、迷ったり、つまずいた

り、もう嫌になったり、もう途中で疲れたって言ったり、もうどうでもええわって自暴自棄じほうじきになったりする人もいますわねえ。

でも、そこをまた、神様にお縋すがりしながら、差し向けて下さった金光大神様と一緒に、時にぐずぐず言いながらも、何か八つ当たりしながらでも、それでもまたおかけ頂いて、まあ叱咤しったして頂いたりしながら、そしてまた歩いて行って、最後は神様のおかげをいただけたところ、あるところに到着さしてもらおうということやろうと思います。

まあ要するところ、教えというのは、みーんな違います。だから人様のお取次とりぎの中身を、何でもかんでも自分に当てはめたらそれでいいという単純なものでもありません。

だから、本当に自分にとって正しいみ教えはというと、やっぱりお結果けっかいに進んで、自分のお届けをさして頂いて、まあ昨日の大西秀さんやないけど、まあまずありのままをお届けをさしてもらおう。その上で、それを聞いて、ああ今この辺に立ってはるんやな。だったらこっちに行ったらいいよということを、自分の立ち位置に合わせて教えてくれます。人の話は、やっぱりその人の立ち位置によってますから、何でも自分に当てはめるということは出来ません。何でもかんでもね。ま、当たってりゃあええですけども、外れたらあきませんからねえ。やっぱりそういったこともあります。

ま、そういう意味じゃあ、ほんとにもう百人百様ひゃくにんひゃくようやし、千人千様せんにんせんようや

さんじゃさんよう

とらつぎ

し、十人十色やし、三者三様やし。もうお取次の中身というのは、皆が違いますから。人間が違ふんですから、立つてるところが違ふんですからね。背景もバックグラウンドも、皆違いますから。それを天地の道理に照らした時に、ああ、この人今この辺やな。おかげ頂くんやったら、こっこの道を歩ましてもらわんといかんわな。あそこに行くには、ちよっとこの山越えんといかんし、ちよっと険しいけど、一人じゃ難しいけど、ま、付き添うてでも、行かしてもらうて、明るい時に行かんといかん時もある。夜の暗い時でも行かんといかん時もある。あの山越えて、次、右行つて、北に行つて、そしたらぐるっと回つてから。

で、ああこの人の場合は船も乗らんといかんかもしれんなあ、ちよっ

と波風強いけど、しょうがないなあ。お守り頂いて。そしてあっち行って、こっち行って、ほんでゴールやなあとかね。やっぱりありますよ。

でもそれは、みんな違いますね。案外早く着く人もおれば、あるいはもう長旅で、五年、十年、二十年かかって、ようやく到着するということ場合もあるかもしれません。でもその間、自分一人だけやなくて、神様が差し向けて下さった、自分にとっての金光大神取次者、金光大神様のお取次を頂いて、お祈り添え頂いて、何より神様にずっと見守られてねえ。

で、またお慕いしてる御霊の神様にもお守り頂きながら、お導き頂いて、自分でもお継りしながら歩まして頂く。そして、だんだんと本人も分かってくる、そしておかげを頂いていく。ま、そういうものやろうと思

ますね。

この教祖様の、ひゃくじんひゃくしき「百人百色」という言葉の具体的なところで言いま
したらね、よく私も引用するんですけど、かたおかじろしろう片岡次郎四郎さん、後に才崎さいざき
教会を開かれた初代の先生でいらっしゃいますけれど、片岡次郎四郎さ
んのお伝えで、こういうのがあるんですよ。なかなかおもしろいん
ですよ。

金光様は人によって異なった教えをされた。ある時、金
光様は、

「才崎はお神酒は好きか」

とたずねられ、「いや、私は不調法であります」と申しあげると、

「一杯ずつはいただくがよい」
と仰せられた。

【理Ⅱ 片岡次郎四郎 五 前半】

お神酒みきというのは、まあいわば、お神酒みきというのは、今御神前ごしんぜんにお供え
してるのが、お神酒みきと本来言いますわねえ。神様に供えて、神様のお徳

を入れて頂いたお酒のこと。それがまあ本来お神酒です。

で、まあその、お酒が好きかという風な、一般的な言い方もあり得るかもしれませんね。まあ要するところが、本来的に言ったら、神様にお供えさしてもらった、いわば日本酒ですよ。お酒のことです。

「才崎は」っていうのは、才崎に住んでらっしゃいましたから、だからあの片岡次郎四郎さんのことです。
かたおかじろしろう

「才崎はお神酒は好きか」と、金光様に尋ねられ、「いや、私は不調法ふぢようぽうであります」と申し上げる。「不調法」っていうのは、たしなみがないことですね。要するところ、お酒が飲めないということです。「いや、私は不調法であります」と申し上げると、金光様ですよ、「一杯ずつはいた

だくがよい」と仰せられた。一杯ずつ、ね。ま、一晚に一杯ということな
んでしょうかね。二杯とは言わずに、まあ「一杯ずつはいただくがよい」
と仰った。

その後、弟の实三じっさが参拝した時、同じように、

「お神酒は好きか」

とたずねられた。実三は、好きでもあるし、私へのお言葉を聞いてもいたので、「はい、少しはいただきます」とお
答えたところ、

「酒は飲まないがよい。酒に吞のまれるから、飲まないが

よい」と仰せられた。

【理Ⅱ 片岡次郎四郎 五 後半】

その後、弟の実三さんじっさが参拝した時、同じように金光様が、「お神酒みきは好きか」と尋ねられた。さっきと同じですね。お兄さん、片岡次郎四郎かたおかじろしろうさんの時と同じですよ。そうやって実三さんじっさにも尋ねられたと。

すると実三じっさは、そのお神酒みきがですよ、好きでもあるし、また「私への私へのっていうのは、片岡次郎四郎さんですね。私へのお言葉も聞いていたので、「はい、少しはいただきます」と、お答えしたそうですね。お答えしたところ、そうすると金光様は、「酒は飲まないがよい。酒に吞のま

れるから、飲まないがよい」と仰せられた。こういうみ教えなんです。

これまあ、ご兄弟に仰ってるんですよ。まあいわば同じ屋根の下で

住んでらっしゃるんでしょうか。一人には、かたおかじろしろう片岡次郎四郎さんには「お神

酒は好きか」と聞いたら、「私はいただきますせん」「じゃあ一杯ずつはい

ただきなさい」と。じゃあ弟のじっか実三さんは、お神酒みきが好きやったんでしょ

うね。で、ひょっとしたら分かりませんよ、もう周りからは「もうあんた

ちよっと飲みすぎやから」「べらいに言われてたのかもしれない。そや

けど兄ちゃんが帰ってきて、「金光様からな、お神酒みきは好きかと言われた」

やと。「わしはあんまりもう飲まんやろて。そやけど一杯ずつは飲んだら

ええて言われたから、飲ましてもらうわ。金光様が飲めい言うんやったら、きっとこれがおかげになるから、ちょっとこれからはもう毎晩でもええから、いただかしてもらおうわ」と思ったんかもね。

で、それ聞いた実三さん^{じっさ}は言ったら、「いや、わしは周りから止められる」のかもしれないですよ。「そしたらじゃあもう金光様とこお参りして、ちょっと何かお言葉いただくかな」と思ったかもしれません。ま、こっからは想像ですよ。でもまあ結局のところ、おんなじように聞いて下さったでね、「お神酒^{みき}は好きか」と言われて、「はい、もう好きです」というふうにして、「はい、少しはいただきます」って、ほんまに少しかどうか分かりませんよ。「少しはいただきます」って本人は言いました。で

も、「ああよう聞いてくれた」と思ったかもしれません。そやけど、「酒は飲まないがよい。酒に呑まれるから、飲まないがよい」と仰せられたと。

まあこんな言われたら、実三じっささんはどんな気持ちやったでしょうね。「あっちゃー」と思った。「聞くんじゃなかった」くらい思ってるかもしれません。

でも、考えてみたら、「少しはいただきます」って、本人「少しは」ってちょっと軽う言うてますけど、まあ金光様は、神様は、「もう酒に呑まれるからやめた方がええ」言うてるんですからね。ほんとには少しやないんでしょうなあ。自分の中では「少し」って言うてるけど、実際にはもう呑まれとんでしょうなあ。だからもうこの言葉だけでも、「自分は少し

たきます、でも金光様から、「酒に呑のまれるから、あなたは飲まない方がええ」って言われるってことは、やっぱり周りからも止められるぐらいのところがあったんかもしれませぬえ。

でも、お兄ちゃんがそんなふうに言ってもろうたから、自分もちよつとまあ一言ね、言ってもらったら、まあそれで免罪符めんざいふですよ。もうほんとに。「金光様が仰ったんやから、わしはただかんといかんのんや」というふうにして、まあ大義名分出来ますからねえ。でも、残念ながら、神様、金光様は、「あなたは飲まない方がよろしい」と、やっぱり仰った。

結局ね、これまあその次郎四郎さんじろしろうに対して、「お神酒様みきいただきなさ

い「って、「一杯でもいただきなさい」と仰る。なんで仰ったのかも問題になってきますでしょう。

まあこの背景は分かりませんし、どっいう思し召してこう仰ったのか。まあ突然仰ったのか。そら分かりません。ここだけでは何とも計り知れんところがあります。

でも、神様からご覧になって、いただいた方がおかげになるなあ。いただくことによって、まあそれこそお守り頂けるなあ。神様のお徳を頂くことによって、命をお守り頂いたり、大難はだいなん小難しょうなん、小難はしょうなん無難むなんにして頂いたり。それによって、日に日に悪いものやら、疲れやら、寝る時であればそれでよく眠れて、疲れもお取り払い頂くということかもしれませ

し、まあとにかく神様のお徳がこもってますから、それをいただいて、そして、本人はよく分かってなくても、それでおかげが頂けるから、「いただいたらよい」ということを仰ってるんでしょう。

逆に、「お神酒は好きか」「はい、少しいただきます」「止めたほうがええ」と、今度は言われた弟さんにとつたら、それによって「お酒を飲まない方がいい」と言われましたけど、言ったことはまあ正反対でしょう。お兄ちゃんには、「あんたは酒飲み。お神酒飲み」。弟さんには、「あんた、酒は飲まるとき。お神酒やめとき」と言われた。

そしたら、言ってることは反対なんですよ。「西に行きなさい」「東に行きなさい」とおんなじですよ。言ってることは真逆なんです、方向は

ねえ。「いただきます」「と言つのと、」「やめなさい」と言つのと、もう真逆でしょう。

でも、本当に真逆のことを言ってるかと言ったら、そういうわけじゃないんですよ。じゃあ弟さんに対しては、やめときなさいと言ったけど、これ、ただやめろと言ってることじゃなくて、ほんとに神様のおかげを頂くためには、やめた方がいい。あるいは、「神様のおかげをせっかく頂いているのに、君は酒に呑^のまれてしまえばかりで、苦勞する形になる。自分だけじゃない、周りも苦勞するかもしれない、子どもも苦勞するかもしれないし、難儀^{なんぎ}になってしまう。それじゃあ、あんたがかわいそうやから、だから呑^のまれるから止めなさい。飲まないのがよろしい」という

ふうにして仰ったんかなど。やっぱりそう思いますよねえ。

そう思ったらね、二人に対して、「お神酒は好きか」というところの質問からスタートして、それぞれ答えました。

一人は、「私はいただきます」。一人は、「いただきます」ていうふうにして、答えは違ってきます。つまりはこの人たちの立ち位置が違ってるわけですよ。立ってるところがね。

じゃあ、いただきますという人には、じゃあいただくんでもいいわというんじゃないかって、踏み込んで、「一杯ずつはいただくがよい」と仰ったんですよ。

で、もう一人の人には、「はい、少しはいただきます」って言うてるけれ

ども、少しはいただくんですよ。じゃあお兄ちゃん、少し、一杯ずつですから少しいただきますでしょ。おんなじことですよ。「いただくんか」「はい、少しいただきます」「言うてるのは言うてるんですよ。ほんとに少しかかりませんけど、でもいただく、そう言うてる。でも、いただくのは、あなたはやめなさい。酒に呑まれるからやめなさい。立ち位置が違ったら、言うことが真逆なんですよ。

でも結局のところ、次郎四郎さんにとったら、お神酒をいただくということが、この人にとってのおかけになる。あるいは、頂いているおかげを大切にすることになる。だから「お神酒をいただきてごらん」と。「一杯ずつでもええからいただきてごらん。あんたおかけになるで」と

いうことなんですね。それで、体やら心やら、命がね、おかげを頂きやすくなるでしょう。

一方で、実三さん^{じっさ}、弟さんに対しては、「あなたはただかんようにもうせんとき。やめとき、もう飲まんとき、その方がええ。その方が、あなたがおかげを頂けるし、頂いたおかげを落とさんで済むし、難儀を生^{なんぎ}み出さんでもええから、だからあなたは飲まんようにし」とやっば仰る。

結局、目指すところは違いますか？ 神様がこの氏子^{うじこ}を導きたいところって違いますか？ 次郎四郎さん^{じろしろう}にどうなって欲しいんですか。実三^{じっさ}さんにどないなって欲しいんですか。目指すところは一緒でしょう。

神様のおかげをしっかり頂いてもらいたい。そして、神様のおかげを落とさんといて欲しい。それだけなんですよね。今よりもっと頂いて、ということなんですな。今よりおかげ落とすようなことはやめて、ということ、それぞれの立場は違うけれども、だから立ち位置が違うから、伝えること、言うことも真逆になる。飲みなさい。飲むな。言うことは違う。でも、導きたいところは一緒。神様のお恵みが、この人が広大に頂けるように。本来頂けるところまで、しっかり頂いてもらうために、おかげを落とさんように。だから、言うてるんですねえ。

だからやっぱり神様は、それぞれのことがかわいいんですよね。次郎四郎さんの方がかわいいってことじゃないですよ、これ。おんなじよう

にかわいいんです。どっちもかわいいですよ。「お神酒^{みき}いただき」って言うこともかわいいし、「もうやめとき」っていうのもかわいいし。どっちも愛情なんですよ。

それは本人たちにとって、それぞれにとって、「いただかない。苦手やなあ」と思ってるとしたらですよ、次郎四郎さんにとったら、「ああ、いただくんやな。ちょっと苦手なんやけど……」と思ってたかもしれないよ。でも、いただかしてもらおう、それでおかげを頂こうってなるでしょうねえ。

実三^{じっさい}さんは、まあ結構好きやったかもしれないけど、でももうちょっと辛抱して、耐えさしてもらって、「金光様が言われたから、ちょっ

とこれ以上飲んだら、おかげ落とすんやなあ」と思って、それを辛抱さしてもらって。で、控えようとされるかもしれないね。

ま、そうやって、お酒との付き合い方、お神酒みきとの付き合い方一つとっても、その人がおかげを頂けるように、お取次とりつぎっていうのはやっぱり違いますね。

これを、まあ間違ってますよ、「兄ちゃんがああ言われたんやから、そうなんや。じゃ、金光様の教えはそやねんな。じゃ、俺もやっぱりただくわ」って、実三じっささんが思ったら、これもつと難儀なんぎになったかもしれないねえ。ま、なったんでしよう。「そうかあ、兄ちゃんそんなこと言われたんか。さすが、金光様やなあ。わしもそう思うわ。じゃあわしもいた

くわ」って言って、これ、他人のお取次とりつきの中身を、弟さんが勝手にね、自分に当てはめてしまって、これ間違った方向に行ってしまった。ほんとは東に行かんといかん人なのに、もう間違って、「西に行けって兄ちゃん」が言われた。ほんじゃわしも、西に行くわ」言って、九州から、そら大陸の方まで行ってしまふような、そんな話ですよ。

その人が今、どこに立ってるかによって違う。だから、きちんとお取次とりつきを頂かんといかん。この人、まあわざわざ自分でね、金光様のところに行つて、また聞きに行ったからえらいですよ。いやあそら、どんなやり取りがあったかもしれませんが、でもひょっとしたら弟が、「ほん

じゃあもう、わしもただかんといかなあ」となると、次郎四郎さんじろしろうが弟に、「いやいやちょっと待て」と。「わしにはそう言われたけど、おまえは違うかもしれんから、ちゃんと一度金光様きんこうさまのそこにお参りしなさい」なんて言われたんかもしれせん。ああそうかと思つて行ったら、ああしめしめと思つたけれど、全然違う形やったんか、がっくりやったかもしれんけれど。でも、本人はどうであれ、神様からご覧みなつて、その人がおかげを頂くために教えて下さつてゐる事柄ことば、これはお神酒みきだけの話やなくてね、金光大神様きんこうだいじんのお取次とらつぎというものは、皆、そういうもんなんですよ。

だから自分一人の教えは、いよいよのところは、あくまで「自分にと

っての「というところがあります。それは他の人がそのまんま、コピーしていいかどうかっていうのは、ちょっと違いますねえ。今こうして、私がお話してることも、できるだけ、できる限り、それぞれの立場がございますから、それぞれの立場の人が誤解がないように、東に行くべきことやったら、東に行くべきという風な話をしながら、この人が聞いたら、間違ってる聞いたらいかなと思う所があるんで、そういう時には、それは違うよということを、できるだけ、誤解することを避けながら、言い付けながら話をしてるつもりではありますけれど。

だからまあ、何でもかんでも「自分に、自分に」っていう風に当てはめるよりは、ま、いよいよのところ、お話を聞いて、ハッとさせられてです

よ、「あ、これもう自分に神様が言われたんや、きついなあ、ドキッとしたなあ」って言うんやったら、きつとそうなんでしょう。

そやけど、言われて、「なんかこれ俺に言われたんかなあ。え、どうなんかなあ」って迷ったり、不安になったりね。なんか逆に、「あつ、そやろ、そやろ。ああ、その方が楽な方向になるしなあ、うんうん」とか、「しめしめ」って、そういう心になったらちよつと違っんでしようなあ。

ま、どっちにしても、一番いいのんは、やっぱりそれぞれ立ち位置が違いますから、お取次とりつぎを頂きながらということころは、やっぱり大事ななあと思いますね。

はい。まあそれぞれ立ち位置によって、神様の、その人の導き方が違

いますから、まずはお取次とつぎで、お結界けっかいで、お届けをして、ありのままをお届けして。それに対して、あなたはこういう風な信心をしたらいいよ、わが身わが一家を練習帳にして、こうさしてもらったらいいよ、というところを大事にしながら、手本にしながら、信心をさして頂きたいもんですよと思いますね。

今日は今日で、神様から一日を頂きました。年頭のみ教えは、それぞれに教えて下さってるところでもありますし、また、これまでお取次とつぎを頂いて、み教えを頂いた方は、それが今自分にとって大事なところであろう。そう思うと、そのみ教えを心につけながらね、首にかけるような

もんで、でも、心にかけて、それを照らし合わせながら、自分の心と体と、照らし合わせながら、今日一日を、わが身わが一家を練習帳にしながら、今日一日、信心のお稽古けいこを取り組ませて頂きたいと思います。

「しんはわが心、しんは神である。わが心が神に向かうのをもって、信心という」ですからね。

ですから、いつでもどこでも、何をしてても、神様と一緒に過ごして頂きたい。神様だけじゃ、なかなかルートが一つの一方通行で、神様と自分とのパイプがただだけ太いんかというのもありますから、だから、そこはそこで求めつつも、金光大神様しんこうだいじん様という、まあ顔役のルートも使いながらね、まあ両方の方が、何かとおかげ頂きやすいですから、神様、金

光様、言いながら、今日一日の信心のお稽古けいこに励まして頂いて、で、また
どうぞ、神様が授けたいと、皆さんが頂きたいというおかげに一歩でも
近付いて、おかげを頂かれるようにと、またご祈念きねんさせて頂きます。
よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第三十三話

令和三年二月二日 朝の教話

発行日 令和七年七月二十六日

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

落丁本・乱丁本はお取り替えます。
